

もなくすなおに感想を述べた歌の方が親しみが湧く。尤も、後の方は「秋」を懸詞にしている。

六九歳、万延元年十一月、「つゆぐさ」は山陽道の旅行である。

八束穂のたりほのをしね打なびきゆたかにかをる小田の朝かぜ
あげまきがかれるまぐさも秋のはなほさまぐの花ぞまじれる
ふるさとはになにはこよひながむるはたれぐらん秋のよの月
故さともとほくなりけりわたの原くもるに見ゆるとよ国の山
ながすの浦しほひはるかに打いでて貝ひろふをとめかずもしられ
ず

これらの歌は勿論新古今風ではない。それかと言って万葉調でもない。古典の風を超越した広足自身の歌である。そうであるのに、彼自身はこの種の作歌を重視しなかったところに彼の作品上の問題がある。

(未完)

注

- 1 『檀園随筆』巻二(全集第二編)二二二項。
- 2 右同書巻一、二二三項。
- 3 国歌大系『近世諸家集』
- 4 拙稿「近世末の新古今風について」(早大国文学会「国文学研究」第五二集)。
- 5 中島広足全集
- 6 ここに列挙する随筆は総て全集に収載されている。
- 7 天保六年没。
- 8 安政六年没。
- 9 第一集は嘉永元年に出版され、以後第六集まで出版され、第七集上・中・下三冊の自筆稿本が国会図書館に蔵されている。

中島広足の短歌作品について(上)

久方のあまつみそらに降る雪のいくよつもれる高嶺なるらむ（不盡山）

ちとせふる雪のしたにや消えぬらむ空にくゆりしふじの煙は

（雑歌二首）

このような実感のない作りものの歌二首を雑歌に入れているだけである。近世末の歴史的進展を身にかけて、個人の体験ではそれに触れていながら、社会的意識に流されて、新しいものを前面に押し出すことができなかったと見る他はない。

『檀園歌集』出版後の晩年の紀行文の中にも注目すべき作品がある。この時代は歌集『しのすだれ』の時代である。六六歳、安政四年「花のしたぶし」は吉野紀行である。長崎を出発するとき、

今年だにしひてゆかずば老はて、つひに見ざらむみよしの、はなゆきて見むこのはるだにもあまたとしおもひすごし、みよしの、花

をしむなよわれもをしまじをしむにはいとゝかなしき老のわかれを

送別宴でこのような直情的な歌を詠んでいる。大和地方を回り、大阪北浜の家に入って、

夜ふけて月あかし。屋の上なる火の見といふ物にのぼりて夜あくるまで月にむかひてよみける歌ども

き、わたるなにはの秋のよはのそらうべもさやけきつきのかげかな

ひとはみなしづまりにけるあきのよのつきにさえゆく虫のこゑごゑ

てるつきのひかりをさまる霧のうちにあけゆくよはの鐘ひびくなら

りやまのはもなにはのそらのつきかけはたゞあさ霧にしづむなりけり

あした火の見にのぼりて

あさ日子のひかりの四方にみてるまで猶なかぞらにありあけのつき

このような感動のまゝの歌を作っている。しかし、彼はこのような作品を重しとしなかった。また。大阪から故郷に帰るときに、

わかる、はしばしなれどもはるかなる道をおもへばなほぞくるしき

ふるさとおもへるよりもこの里のたちうきまでにいまはなりぬる

わかるともいはじよ今はほどもなく来りてこゝにすまむとおもへば

この歌の通りに翌安政五年に大阪に来てこゝに文久元年まで住んだが、このような実情実感の歌こそ近世末に早く主流になって欲しかったものである。

六八歳、安政六年、「初しぐれ」は河内国の歌人で、岩崎美隆の門人中⁽¹⁰⁾西多豆伎と共に大和国を巡遊した紀行文である。

秋しの、ふりにし里をとひ来つるけふうれしくもしぐれざりけりうちつけにさびしき空のけしきかなきのふくれにし秋しの、里

外ゆきの装いをした新古今風の、恐らくはそれが彼の襟を正した時の歌であったと思うが、そうした歌よりも、このように何の気取り

春がすみたちなそはりそわだの原沖つ八十島みつ、ゆかまし

長崎から熊本の家に戻る途中で詠んだ歌で、日記文では、その場で詠んだことになっている。浮足だった叙情的な歌風は旅行中の忙しさの中で詠んだように思われるが、万葉調を狙って古今調になると言っている彼の歌論にかなっているように思われる。これと同じ調子のものが、短かい文章の中かなりある。

いさはやの舟津のさとにかりねしてみゆの高嶺の月をみるかな
ゆふしほもかなひにけらし月まちし浦のふな人ふなよそひせり

磯山のうめさく道をこえくれば小松がおくにきゝすさおどる

この歌の後に、あひ津の関を京方の遊び女どもが紅粉を濃くつけて長崎の方に帰る情景を書いている。それとこの歌と合わせて見ると古今集春歌下、紀貫之の志賀の山ごえで女に逢った時の歌「あづさ弓はるの山べを越えくれば道もさりあへず花ぞ散りける」が連想される。

朝日さすかた山ばたのむぎふよりひばりなきたつ声ののどけさ
単純な叙情の中に実感が感じられる歌であって、歌集の中にはこの種の歌がないのが残念である。

ゆゑのをかうちこえくれば三の沢まつ原とほく浪のよる見ゆ

ふきおろす磯山風やはやからし沖になづさふあぢのむらとり
これなどは万葉調である。

よる浪の声もひとつにきこゆなりあらいそかげの松の夕風

これは古今風であるが、調べに爽やかさがある。広足は文政十三年九月に大江戸へ上った。その時の日記が「東路日記」で、四〇歳天保二年に書かれた。この中にも万葉調の歌がある。

たび衣朝たちくればあその野のきりのへとほくたづなきわたる
さよふかきあしまのかもの声きけばわがしら川のいほりしおもほ
ゆ（淀）

すゞか山今朝こえくれば散のこるもみちばしろくしもぞおきにけ
る

さがみぢの朝川わたりわがくればいづの大島にけぶりたつ見ゆ

（佐川）

いはなみのひゞきさやけき上つ瀬にかはづ妻よぶこゑきこゆなり

（あさ川）

これらは万葉調と言えるが、旅であるために、目に移った第一印象を何々すればという形で詠んだものが多い。また、

天のはらふじの高ねゆたぎちおつるかしこき川とけふわたるかも
（ふじ川）

天雲のはれたる空にそ、りたつふじのたかねぞたかくたふとき

日本の国のしづめの山なればうべうらやすきがたなりけり

こうした歌も古風の歌と言える。その中にはまた、

みこしぢのむらやまとほく雪みえてうみ吹わたる風ぞ寒けき（矢
橋）

むら山のみどりの末に白たへのふじの高ねの雪ぞさえたる（甲府）

のように、実感をもとにした叙景の歌がある。技巧もなく素朴な感動を歌っている。こうした方向に彼が進んでいったならば、彼も和歌革新者の一人になったかも知れないのに、残念なことであった。

このような実感的な新しい富士山の作品がありながら、『檀園歌集』には、

前以て万葉の技法を持っていたからであって、自然発生的にそうになったものではない。彼の紀行文には新古今風の作品も多い。例えば、文政四年、三十歳の「野坂のうらづと」には、

立のぼるけぶりの末もうす色に匂ふ高嶺の花のさかりか（瓦焼）
朝かげにほふのきばの花の露こぼれ初ぬるうぐひすのこゑ

のような新古今風の情趣を主にした歌がある。「東路日記」でもこのような歌の捉え方をしようと思えばできたはずである。しかし、この日記の歌は、六郷での歌は、単純な叙情を高い調べで表現していて、万葉風と言える。箱根での歌は万葉の歌や実朝の歌を模した点があり、田子の浦、やはぎ、高須での歌もそれぞれに第一印象を主にして感動を歌う万葉的歌風を持っていることは明らかである。

この時代は、まだ勉学を始めたばかりであり、一柳千古に入門した直後である。文化十年に熊本に帰り、同十二年に辞職するが、熊本に帰ってからは宣長に学んだ長瀬真幸に入門する。真幸の門からは和田巖足という万葉調歌人も出ているから、熊本にはその頃、万葉調の気風があつたかも知れない。また江戸派の中の万葉的気風を伝えたのかも知れない。いずれとも決定的に言うことはできないが、青年時代の作品としては、これら紀行文中の歌の他には知られないので、免に角、二三歳頃には万葉調が広足の中にあつたとする他はない。

ところが、二九歳、文政三年の「秋のやまぶみ」には
めづらしみ秋の山ちをとめくれば初を花こそうちまねきけれ
わたの原しほ吹みだす秋風のあとこそみゆれ沖つ八重なみ
沖つ風吹にけらしな松がねをさらしの浦の夕なみの音

などの歌が見られるが、調べが張っており、この種の歌としてはよいものである。しかし、歌風としては古今集以後の後世風であり、近世としての新しい境致にあるものではない。

また、三十歳、文政四年の「野坂のうらづと」には、

立のぼるけぶりの末もうす色に匂ふ高嶺の花のさかりか（瓦焼）
朝かげにほふのきばの花の露こぼれ初ぬるうぐひすのこゑ

の歌がある。この二首は、前者は「けぶりの末」の語句や、一首構成の複雑さ、後者は「こぼれ」を露の縁語にして、露と声の両方に懸ける複雑さ、そして声をこぼれるとする感覚的な扱い方は新古今風である。

三二歳、文政六年には二つの紀行文があり、「ふなぢのなやみ」には、

夕ひばりなく声きけば行末の雲ゐはるかにおもほゆる哉

という歌があり、これは古調の歌である。また、「後夢路日記」には吹のぼるはま松風におくられてをのへにひびく夕浪のおとという、全く新古今調の作品がある。

夏山やしげる青葉の木のまよりみちくるしほの浪しろく見ゆ

大空のほしはけたれて松のはの露さやかなるよはの月かな

よひのまの雨雲はれて松風のこゑすむ空に月ぞかかれる

これらも整った歌であるが、そして実感的な歌であるが、自然の微細な美だけを捉えているところが、伝統的であり後世的である。

三五歳、文政九年「とこよぢの日記」には古今調から万葉調にも近い次の作品がある。

みねたかみみに吹のぼる松の風なほそでさむしころもきさらぎ

文政六年十二月	三二歳	浦のしるべ
文政七年秋	三三歳	夢路日記
文政九年二月	三五歳	とこよちの日記
文政一〇年	三六歳	檀園紀行
文政一三年	三九歳	筑紫日記
文政一三年三月	三九歳	相良日記
天保二年四月	四〇歳	東路日記
天保三年三月	四一歳	金海山詣記
天保四年正月	四二歳	樺島浪風記
嘉永末年頃	六二歳頃	雲のしづく
嘉永六(七カ)年	六二歳	佐嘉日記
安政四年	六六歳	花のしたぶし
安政六年	六八歳	初しぐれ
安政七年	六九歳	雲廻古呂母
万延元年十一月	六九歳	つゆぐさ
文久二年	七〇歳	うすぎり

『檀園歌集』を出版したのは天保十年、四八歳の時で、天保二年の「東路日記」までは歌集の年代の範囲内に入るのであるが、紀行文中の短歌は殆んど歌集に採られていない。そして、歌集には万葉調と見られる作品は殆んどない。歌集だけを見ると万葉調の影響は全くないように見える。それなのに、歌論には、やはり万葉時代賛美の意見が書かれている。これも、彼の歌論と実作のくい違いと思われるが、青年時代から中年時代の紀行文中には万葉調の短歌が見られる

広足は江戸在住の二十歳頃千古の門に入ったが、文化十年、二二歳の年勤務替えて熊本に帰った時の紀行文「東路日記」には万葉調の歌がかなりある。

水きよみそこのたまものかつみだれかつなびくさへさやに見えた
り(六郷の河辺)

ゆふかぜになみたちわたるかながはの瀬戸の海づらなみたちわた
る(金河)

かながはの岡べにたちてなみ間よりとよさかのぼるあさ日をぞ見
る

しづのをがおしねかりほすかたへよりやま田のひつぢ生いでにけ
り(さかひ木)

神無づきはこねのみさかこえくればむらやまもみぢいまさかりな
り(箱根)

清見がたきよきはまべにやすらへばおきつしほちにふねのゆく見
ゆ(田子の浦)

みかはよりあさたちくればうちわたす野沢のみづにこほりゐにけ
り(やはぎ)

このあさけいぶきのたけを見さくれば日かげにはふみねのはつ
雪(清須)

これらの歌は東海道から美濃路に出る間の各名所で詠んだ歌であるが、これは題詠でなく実際にその地を通過して歌ったものである。実際経験に即して歌うために、このように大づかみに、第一印象を主にする歌になった点があると思われるが、それには万葉的な捉え方が、この場合適当であつたであらう。しかし、それが出来たのは、

いく夜かく寝よとの鐘にそらねしてそらにたのめし人を待つらむ
椿市の契りかひなく歌がきの八重のくみがきたち隔てつ、

夢ならで見えししるしにさよごろもかへしし袖をかへしてぞぬる

おもかげにながむる月も明けはてはかなくのこる袖のうつり香

さらにまた打ちふす牀を起き出でて面影にさへわかれぬるかな

軒ふかきむぐらにかこつ露けさのひるまもしぼる袖や見えけむ

知るらめや行きかふ船のことづてもなみのよるくくたくこゝろ

を

人しれずかけし心もそらだきのほかに匂ふをすのおひ風

玉だれのをすのたれすのかけ初めし心うごかす軒の夕風

恋歌は一一六首あるがその中、新古今風と思われるもの一七首を

抜いた。この歌集の恋歌は大部分が手のこんだ技巧の歌で宣長の歌

集に似通っている。恋歌の墮落は近世短歌の通性であるが、それは

また、中世からの伝統でもあった。広足の恋歌には本歌取の技巧を

学んだものもあり、複雑な比喻を使ったものもある。とても新古今

集恋歌の情趣に及ぶ作品はないが、技法は新古今集を学んだと思わ

れるものを抜いた。またその他の歌も新古今集以後の技法を学んだ

もので、古今集の知的ではあるが、一面に持った感動さえに及ばな

い作品ばかりである。

最後に雑歌を見ると

入日影かくる、海のはて見えて豊はた雲をあらふ白浪

つれづれのながめにいとふるごとをしのぶにあまる軒の玉みづ

故郷を恋ふる涙もおちそひぬ草ひきむすぶ露の枕に

暮れにけりをのへの松のゆふづく日いさよふ風の音をのこして

すみの江はしほひに浦やなりぬらむ浪にわかる、松風の声
谷水のながれの外に道もなし松よりおくの槇のむらだち

ましばたく端山のけぶりほのくれてねぐら木ぶかき村鳥の声

しづが住む里をとりのとりの音もねざめに遠き山かげの庵

峯たかき松のひびきにたぐふなりあらしにむせぶ山猿の声

吹きまよふあらしにたぐふかねの音のしるべかひなき野ちの夕暮

浦ちかき篠屋の軒に月おちて芦間にかへるあまのつり船

このような新古今風の作品を見る。雑歌は一八八首あるので、率は

微々たるものであるが、この歌集中の新古今風の全作品が歌集中に

占める位置はまことに大きいものがある。そしてそれは、彼の歌論

と照応して見ると解きがたい疑問になる。

二

広足は多くの紀行文、随筆を書いている。特に紀行文の中には多
くの短歌を混じえている。この文の最も早いものは文化十年十一月、
二二歳の時の「東路日記」(後西帰)⁽⁵⁾であり、最後のものは、文久二
年、七〇歳の時の「うすぎり」である。次に、年代順に書名を列挙
する。

(6) 文化八年五月	二〇歳	春のかり(下・前西帰)
文化一〇年十一月	二二歳	東路日記(後西帰)
文政三年秋	二九歳	秋のやまぶみ
文政四年春	三〇歳	野坂のうらづと
文政六年三月	三二歳	ふなちのなやみ
文政六年九月	三二歳	後夢路日記

むらしぐれ晴れにけらしなもみぢ葉の色にきえ行く峯のうき雲
朝ぼらけ外山をこむる秋霧にあまりてにはふ木々のもみぢ葉
明けわたる浦わに消ゆるいさり火のなごりこがる、木々のもみぢ葉
は、そ散る梢をつたふ友猿のなく音もさむし秋の山風
秋歌は総数一五二首あり、その中から二〇首を抜いた。現実をあり
のままに見ないで、感覚的に、耽美的に眺めている点で著しく新古
今的な歌がかなりある。

冬歌

もみぢ葉にほふ夕日の影ぬれてひとしぐれする山もとの里
吹きはらふ松のあらしのはやければ時雨れかねたる峯の浮雲
なみたてる松を風のぬせきにてたえず吹きこす木々のもみぢ葉
山川の岸より岸に吹きわたす木の葉もはやき波の朝風
ひとりねの衣手さえてあけにけり笹の葉しろき夜の初霜
花にだにすさめぬ庭を今さらに誰ふみわけむ霜のした草
さよふかく霜ぐもりせし月影のはる、もさむし明方の空
冬ふかき川瀬の浪のおとすみて暁さむき水とりの声
吹き払ふ嶺のあらしやはやからし松の葉くろきけさの初雪
板垣のこなたかなたに散りのこる蔦の葉白くふれる初雪
照る月の光の花にちりまがふ雪おもしろき有明の空
風さゆるをかべの松の木の間より雲ゐにしろき雪の群山
足柄は船木きりおろす道たえて八重山深くつもる白雪
吹上の浜の松が枝音さえて風のすがたにつもる白雪
しほなわのこぶりそめけむおもかげを雪に見せたる沖つしま山
むささびのかよふ梢もうつもれぬ高円山のみねのしら雪

雲まよふ嶺の松原音さえてあらしの上につもるしら雪
うづもれし風のひゞきもあらはれて雪うちけぶる嶺の松原
玉すだれか、ぐる袖に散りくめり柳にあまる軒のしら雪
朝ぼらけ風しづまれるかた山の竹の葉しのぎつもるしら雪
朝風の吹きもおこさぬ一むらや下折れはてし雪のなよ竹
さやぎこし竹のありかやたえぬらむ雪の上ふく庭の朝風
聞きなれし松のあらしの響さへ埋れはてぬる雪のした庵
よさの海の波路はれゆく朝なぎに雪をわたせる天の橋立
吹きのぼる谷のあらしやはやからしみ雪にくもる嶺の松原
冬歌は総数一八六首で、その中、一一五首を抜いた。どれも美的感
覚を中心にした叙景の歌で、表現は写実的に見えながら実は美的感
覚を中心にした主観の歌であるところに新古今の伝統が見られる。
歌論のところに述べたが、弱々しい長崎の歌を広足が強い歌にし
たと門人が言っているのは、『檀園歌集』では万葉調ばかりではなく
新古今調の強さも大いにあると思われる。

恋歌

ことのはに今日かけそむる下露のしたにくだけしほどは知らなむ
ゆくへなくまどふ心のくるしさを聞かじや今はありとばかりも
人ごころあやふく見えしかけはしのふみ通はしておちるぬるかな
うちかへしうらみやせまし浜千鳥あとだにとめぬ浪のこゝろに
みづぐきの深き心を見てしよりわたらぬ川に身をしづめてき
さてもなほ同じなげきの杜の露いつまで袖にかけていのらむ
うれしきに何か心のさわぐらむたのめおきつるゆふぐれの空
みちのくのおくをかねつ、契りてもえぞたのまれぬ人の心は

はるばるとかすむ浪間を出づる日の光にうかぶ沖つ島山

よる波のひゞきもたえてすみの江のあら、松原かすみこめつつ

聞きわびし松のしづりの音かへて雨のどかなる山かげの庵

ゆふかげの花の木の間に見えそめてにほひ添ひゆく春の夜の月

散りまがふ花のところを立ちがてのたもとににほふ夕月の影

くる、日もわかぬ桜の木の間より袖ににほへる春の夜の月

大空になきしひばりも落ちはてて光そひゆく春の夜の月

みをとほくかすめる月の影ふけて猶風さむし川づらのやど

夕ぐれはあまの煙もひとつにて霞をわたる春の浦船

立ちそへば霞の底に花の色をしづめもはてぬ春の夜の月

滝つ瀬のいはもとどくら咲きしより梢をさらぬ水の白波

よしの川桜吹きまく水上のあらしをた、む瀬々の白波

あまの原のどけき風のいろみえて霞になびく春のうす雲

春の歌は総数一八五首で、その中から抜いた歌は二〇首である。中

には新古今前期の歌風と思われるものもあるが、三代集に対比させ

ると新古今風と言わねばならぬ。

夏歌

ちる花のなごりかすみし峯はれて夏あらはる、木々のむら立

月影にさはらぬほどをすがたにて繁りなそひそ窓の若竹

ほと、ぎすかたらふ声もそこなき雲のまよひのむらさめの空

こ、に寝ぬ人は聞かじなほと、ぎす夜川の浪のほのかなる声

ほの見えし日影やいづら浮雲のまた立ちおほふ五月雨の空

さみだれはやすいする夜もなかりけり枕をゆする川なみの音

浪こゆる音もとゞろの五月雨にあやなくなにをさ、やきの橋

さみだれの雲吹きおくる夕風のひゞきもはる、みねの松原

月てらすすだく螢の光さへ露になり行く野べの草むら

夏の日のながすの浦は行きくらすまさごちすゞし夕月のかげ

夕風をまちとる袖にうつり来て月影そよぐ軒の若竹

夕立は晴れにけらしな鳴く蟬の声より落つる木々のした露

朝風や吹き立ちぬらし白露の玉ゆりこぼす池のはちす葉

夏歌は総数一四四首であり、その中から十三首を挙げた。

秋歌

立ちわたる夕浪すゞしみづくきの岡のみなどの秋のはつ風

ありあけの影をさまりておく露も花になりゆく庭の萩原

秋風の行く方見えてはるばるとなびく末野の花す、きかな

吹きよする荒磯波をさながらに尾花にうつす秋の浦風

ゆふぐれの山路のあらし吹きまよふころもで寒し木々の下露

秋ふかき山分衣いくたびかたもとにしほる霧の下露

かげふかき楨のした道吹きおくるうき雲早し秋の山風

むぐらふの軒もる露や寒からし枕になる、こほろぎの声

入日さす豊はた雲のいろくれてうす霧なびく秋の海原

空はれてみちくる潮もはやさきのせとの浪間にうかぶ月影

むらあしのしげみにきはふ蟲の音の中より出づる秋の夜の月

影きよき入江の水の空はれて月吹きすさぶ波の秋風

こほろぎの声もさやけきかた岡の松をのぼりてすめる月影

風わたるをのへのす、きほのぼのと月に晴れ行く浮霧の空

引きむすぶまくらの露をたづね来てあひやどりする野べの月影

さそひくるきぬたの音もをちこちにやめばつかる、夜半の秋風

中島広足の短歌作品について（上）

辻 森 英

一

広足が新古今風を否定したことは既述の通りで、俊成・定家については、「彼卿たちのは虚文にながれて実意をうしなへる多し」⁽¹⁾（すゝのや翁の詞の論）と言ひ、新古今時代については、宣長の論に対して「又、かの新古今を歌の盛也といわれたる論のあしき事は、春海はやく論らひたり。おのれも歌物がたりにいへればこゝにはもらしぬ」⁽²⁾（ぬえ人の論）と言ふ。「歌物がたり」とはどの文を指すのか明らかでないが、宣長の歌論に対しては徹底して反対している。

こうした点から見ると、広足は新古今集絶対反対論者であることは明らかであるが、その彼が天保十年、四八歳で出版した『檀園歌集』には、新古今風の正風ともいふべき歌が多く存在するのはどうしたことであるか。そのことは嘗て論じたが、加納諸平、伴林光平、岩崎美隆等の新古今集と何らかの関係がありそうな人と比較しても、広足は最も新古今的であることが知られる。しかも、彼の歌集と歌論が書かれた年代のずれというものは現在では明らかにできないのである。それは、歌論が書かれた年月が明らかにできない上に、書か

れてから相当後に出版されたり、原稿が整理されたりしているからである。

新古今風と言っても、耽美的・浪漫的というような観念的な概念ではその特色を捉えることはできない。それは古今集以来の平安時代、鎌倉時代を通じて、また、その後の時代の短歌の通性であったからである。やはり、新古今風というものはその独特の表現法から区別する他はない。その点から新古今風と考えられる全作品を次に列挙する。

春 歌

いはそ、ぐ滝のひゞきは春ながら猶雪しろし谷の松ばら
梅やなぎ梢もわかぬあけぼのかすみをつたふ鶯の声
あさくらの関の名のりにさきだちて谷の戸出づる鶯のこゑ
やまの梅のしたがり行きめぐる道なつかしくにはふ春かせ
南ふく風のまにまによる波の池のおも遠くかをる梅が香
もえわたる柳のいろもひとつにて煙なぐる、春の川水
春もいまなかばはすぎの下庵に山風さむみ向ふうづみ火
春風に打出し浪もたえだにまたこほり行く谷川のみづ